

『鷺尾がみた長崎②』

○早朝。長崎駅前の陸橋。

近くのベンチに女性が座っている。

鷺尾、空を呆然とながめている。

ベンチの女性「ここへなにしに来たんですか？」

カラスが、かあかあ鳴いている。

鷺尾「川の上に存在した町の風景をみにきたんです」

ベンチの女性「どういうことですか？」

鷺尾「暗渠をみにきたんです」

ベンチの女性「そうですか」

鷺尾「このベンチから、いつも何をみているのですか？」

ベンチの女性「私は毎日、朝早く起き、あの山の向こうの紅い朝やけをみます」

鷺尾「日課ですか？」

ベンチの女性「ええ。そこのコンビニで、サンドウィッチとコーヒーを買い、ぼんやり、束の間をすごすのです」

鷺尾「…」

ベンチの女性「だんだん紅くなってきましたでしょう」

鷺尾「ええ」

ベンチの女性「さまよい歩いている点で、あなたと同じですね。私はこの町の、浮浪者のひとりです」

鷺尾「これから新しく改修された教会をみにいきます」

ベンチの女性「そういえば、この町をかいた詩に登場する狂った女もいなくなってしまうました」

鷺尾「なにもかも通り過ぎていくのですね」

ベンチの女性「ええ」

鷺尾「失礼します」

ベンチの女性「…」

○大浦天主堂の脇にある芝生。

プティジャン神父の白い像が立っている。

少年、像の前で祈っている。

鷺尾は彼ら二人の会話を目撃する。

少年「信仰者たちはどのようにあなたに声をかけられたのでしょうか」

プティジャン神父「私が庭の手入れをしていたとき、ちょうどあなたと同じように、囁くように、そっと信仰をうちあげたのです」

少年「ずっと祈りつづけてきたのですね」

プティジャン神父、少年の頭にそっと手をそえる。

○浦上天主堂の前にある青果店の喫茶コーナー。

店員「あの、ここでまず、注文してください」

鷺尾「え？」

店員「こちらで、注文してください」

鷺尾「あ、すみません」

店員「今日のおすすめは、桃ジュースです」

鷺尾「うーん」

店員「…」

鷺尾「じゃあ、西瓜で」

店員「西瓜ジュースですね？」

鷺尾「ええ」

店員「それでは、お席でお待ちください」

店員「お待たせしました」

鷺尾「こんな朝早くから開いているんですね」

店員「ええ。夏は朝から開店しています。ミサが終わって涼みにくるんです」

鷺尾「今日は、人の気配がありませんね」

店員「いつもよりミサが長引いてるのかもしれませんが」

鷺尾「この西瓜ジュース、おいしいですね」

店員「ええ」

鷺尾「カットされた西瓜がついてくるのがいいですね」

店員「…」

○青果店の前

鷺尾「ごちそうさまでした」

鷺尾、青果店のドアをあけ外に出ていく。

お店を出ると、真っ暗で誰もいない。

鷺尾、青果店をみつめる。

○水辺の森公園。早朝。

男女、あらわれる。

鷺尾もまた、二人の後をついている。

二人の足下から、蟹があらわれる。

男「蟹だ」

女「二匹も」

男「起こしちゃったかな」

男女、橋の上で立ち止まる。

男「ここで休もう」

女「ええ」

男女、橋の上に仰向けに寝転がる。

男「また、君と会えるなんて思ってもみなかった」

女「私も」

女「空気が冷たくて、気持ちいい」

男「うん」

鷲尾、二人に近づくと、すでに消えている。

○稲佐山の森の中

鷲尾、にわとりを見つめる。

鷲尾、にわたりの後を追って、奥へと進んでいく。

○森の奥、すこしひらけた場所。

鷲尾、にわとりを追ってやってくる。

そこでは、亡霊たちがボーリングに興じている。

亡霊のなかには、町で見た男女、ベンチの女性や店員らしき人物も交じっている。

西洋人の顔立ちをした森の住人が気さくに鷲尾に話しかける。

森の住人「ハロー」

鷲尾「あ、こんにちは」

森の住人「なにしていますか？」

鷲尾「にわとりを追ってきたら、迷いこんだんです」

森の住人、笑う。

森の住人「わたし、向こうの小屋に住んでいます」

鷲尾「ええ」

森の住人「きこり、やっています」

鷲尾、亡霊たちがボーリングをやっていることに気づく。

鷲尾「みなさん、ボーリングされてますね」

森の住人「ここ、発祥地」

鷲尾「ああ、そうなんですか」

森の住人「わたしが作ったピン」

森の住人、あたりが暗くなってきているのに気づく。

森の住人「薪を運ぶの、手伝ってください」

鷺尾「あ、はい」

二人、薪を運ぶ。

森の住人、火をくべる。あたりが明るくなり始める。

鷺尾「明るいですね」

森の住人「ゆっくり休んで」

鷺尾「サンキュー」

鷺尾、芝生の上に寝そべる。

鷺尾「(亡霊たちにむかって) 私は少年だった頃を思い出します。あのときからなにひとつ変わっていないのかもしれませんが。私がみた少年は、私自身かもしれません。わたしはずっと少年のままで、もう一人のカメラマンの私はずっと死んだままだったのかもしれませんが」

鷺尾「私は聞いたことのない風を記憶しています。耳の奥で鳴っている音です」

鷺尾の体、消えていく。